

# 日点委通信

No.24

2008年11月1日発行

## ルイ・ブライユ生誕200年祭に寄せて

日本点字委員会会長 木塚 泰弘

ルイ・ブライユ(Louis Braille)は、1809年1月4日に生まれ、1852年わずか43歳の若さで、誕生日の2日後に肺結核で亡くなった。12歳のときバルビエから紹介された12点点字を元に、1825年16歳のとき、アルファベット・数字・楽譜から成る6点点字の体系を発表した。やがて生徒たちは、この点字の読み書きに熟達するようになった。パリ訓盲院では点字の使用を認めるようになっていたが、フランス政府はブライユの死後1854年にやっと公認した。その後ルイ・ブライユの点字は、世界各国の言語に用いられるようになった。

日本では、1890(明治23)年に石川倉次により仮名の点字に翻案され、現在に至っている。

2009年1月4日から5日間、パリのユネスコ本部では生誕200年祭が盛大に行われる。日本点字委員会からは、WBUAP(世界盲人連合アジア太平洋地域)会長の指田忠司氏に、日本における点字投票の歴史について発表してもらおう。また、田中徹二日本点字委員会副会長が「日本の点字」について発表する。

さらに日本点字委員会では、小学校4年生以上を対象として、「点字を読んでみよう！」と題する見開き4ページのパフレットを大量に印刷して点字の普及に努めることにしている。

## 日本点字委員会総会報告

日本点字委員会は、2008年5月31日・6月1日の両日、横浜市都筑区の障害者研修保養センター「横浜あゆみ荘」において、第44回総会を開催し次の事項を協議した。

## 1. 医学用語点字表記専門委員会報告

渡辺勇喜三委員長から2007年9月8日と2008年1月19日の2回会合を持ち、委員会としては「用例集」は作成しないことと、表記基準として検討することの内容を確認したとの報告がなされた。2回目の会合では、岩屋芳夫・宮村健二・和久田哲司の3氏からレポートがあった。

## 2. 表記符号についての二つの提案

関東小委員会から二つの提案があった。(1)『日本点字表記法 2001年版』第4章第3節7の【注意】に次の事項を加える。「一つの語句に複数の文中注記符が必要な場合に限り、二つめ以後の文中注記符の⑤⑥の点の前から行移しができる」(2)同第4章第5節1の第1順位の後ろに次の文を補足する。「小見出し符類・文中注記符・詩行符類も、第1順位(1)句読符と同様に扱う」

(1)については、望ましい行移しの仕方を改めて協議する中で取り上げることとした。(2)については、小見出し符類・詩行符類は提案どおりとし、文中注記符については別途検討することとした。

## 3. 「日本点字表記法」における表記符号の用法についての問題点と改訂に向けての提案

近畿点字研究会から標記の提案が次の8項目についてなされ、いずれも継続審議の課題となった。

- (1)句読符を使用する表記を標準とし、使用しない表記を例外とする。
- (2)カギカッコの用法を見直す(会話文・引用文は第1カギとし、第2カギは異なる用法に用いる)。
- (3)伏せ字の乱用を防ぐための規定を設ける。また、伏せ字に数字やアルファベットが続く場合に第1つなぎ符は不要とする。
- (4)カギやカッコ類、点訳者挿入符の閉じの前にある読点は「省略することができる」ではなく「省略することを原則とする」とする。
- (5)囲みの符号が連続して他の表記符号に誤読される場合は、一マスあけか二マスあけにする。
- (6)カギで囲んだ会話文や引用文を「と」などの助詞で受ける場合は「行を替えても行頭一マスめから書いてもよい」とする。
- (7)本来一続きに書くべき箇所での行移しの許容について明確な理由を提示する。
- (8)見出しの途中でページをまたぐことを禁止する規定を設ける。

## 4. 漢字や仮名で書き表された単位の切れ続きについて

これまでのまとめを「日本の点字 第32号」に掲載し、引き続き意見聴取を続ける。

## 5. 最初の点字印刷物の表記とその後の進展

金子昭委員から、我が国における点字印刷機による最初の印刷物を1894（明治27）年の「大婚廿五年ノ春ヲ祝シ奉ル（訓盲字体）」としての標記の発表があり、意見交換が行われた。

## 6. アジア諸言語の点字考案経緯について

日本点字図書館の澤村潤一郎氏から標記の調査報告がなされた。アジアの25言語について、調査の概要、点字一覧とその使用国、初考案年、初考案者のタイプ、考案の契機、インドと中国における表記の統一と標準化の歩み並びに点字コードについて等の紹介があり質疑が行われた。

## 7. 点字楽譜専門委員会の発足

1996年に改訂された点字楽譜の国際マニュアルを統一して用いることを前提に、学校教育における点字楽譜の取り扱いを検討する専門委員会の委員として、次の6名を事務局から提案し承認された。岩城美智子氏（筑波大学附属視覚特別支援学校）、加藤俊和氏（点字楽譜利用連絡会事務局長）、河相富陽氏（箏曲家）、阪下由実氏（日本ライトハウス点字情報技術センター）、田中禎一氏（点字楽譜に造詣が深い元盲学校教員）、松永朋子氏（元トニカ代表）。委員長には加藤俊和氏を推挙し承認された。

## 8. ルイ・ブライユ生誕200年記念事業について

木塚泰弘会長から次の3点についての提案があり承認された。(1)2009年1月4日～8日、パリのユネスコ本部のラウンドテーブル「日常生活における点字」の部門で、日本における点字投票の歴史について発表する指田忠司氏を日本点字委員会から派遣する。(2)国立民族博物館の広瀬浩二郎氏企画の2009年に開催を予定している点字についての展示会に日本点字委員会として協力する。(3)点字の普及を目的とするパンフレット等を作成する。

## 9. 日本点字委員会の英語名について

木塚泰弘会長から「Braille Authority of Japan」とする提案があり承認された。

## 10. 委員の交替について

盲教育界代表委員の道村静江は岩屋芳夫（横浜市立盲特別支援学校）に、盲人社会福祉界代表委員の窪田和代は福井哲也（日本ライトハウス点字情報技術センター）に、当山啓は植村信也（日本点字図書館）にそれぞれ交替した。また、総会に先立って開催された両界代表委員協議会は、当山啓を学識経験委員に推薦し、同氏は引き続き事務局長に再任された。